様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３３２５

研究課題名（和文）後期アンリ言語論の統合的解釈モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of an Integrated Interpretive Model of the Theory of Language in Late Henry's Thought

研究代表者
服部　敬弘（Hattori, Yukihiro）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：１０７７０７５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アンリの言語論を、後期のキリスト教三部作を通して分析し、その全体像を明らかにした。それと同時に、前期・中期の著作に言語論の原型となる発想を探った。アンリは内在を超越の本質と捉えることによって、命題で表現されうる言語の基礎として内在を提示する。内在と超越は「生の言葉」と「世界の言葉」という二元性として展開される。前者が後者の基礎たりうるのは、生が言語の素材となる内容を産出することで内在から超越への移行を可能にするからである。しかし、この移行は最終的に「生の言葉」自体ではなく、それを対象化する個々人の決定に委ねられることで「世界の言葉」の基礎づけは先送りされる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで「生の言葉」と「世界の言葉」、それぞれの性格については多くの研究が費やされてきたが、前者が後者をいかに基礎づけるかについては、アンリが多くの記述を費やしているにも関わらず、主題的な研究はなかった。それに対して、本研究はこのアンリ言語論における従来の研究の空白を埋めるものである。その過程で、アンリの力能論の重要性が再認識されると同時に、アンリが生の言葉と世界の言葉との架橋を試みつつも、実質的には両者を分断していることが示された点は、アンリ研究史において重要な意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This research analyzed Henry's theory of language through his later Christian works, while at the same time exploring the original ideas of language theory in his early and middle period writings. The results are as follows: By regarding immanence as the essence of transcendence, Henry attempts to view it as the basis of language, which is established in propositional form. Immanence and transcendence are developed as a duality of "the Speech of Life" and "the speech of the world. The Speech of Life makes possible the transition from immanence to transcendence by producing the material content of transcendence. However, Henry postpones the foundation of the "speech of the world" by leaving this transition to the decision of each individual who objectifies the Speech of Life, rather than drawing it from the "Speech of Life" itself.

研究分野：西洋哲学

キーワード：ミシェル・アンリ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

言語をめぐる現象学的研究は、フランスにおいて、サルトル、メルロ＝ポンティ、さらにはデリダ、レヴィナスによって多様な仕方で探求されてきた分野である。近年は、J. Benoist（*Phénoménologie, sémantique, ontologie,* 1997）以降、A. Gallerand(*Husserl et le phénomène de la signification*, 2014)や J.-P. Renaudie(*Husserl et les categories*, 2015)による、最新のフッサール文献研究と分析哲学への参照に基づいた、新たな現象学的言語論が提出されている。フッサール『論理学研究』の詳細な読解、及び新カント派等、当時の論理学的成果との影響関係の掘り起こしを通じて、改めてフッサール言語論の再構築をはかる彼らの研究は、フランス現象学研究にも多大な影響を与えつつある。国際的にもフランス現象学の研究は、フッサール研究の進展と分析哲学への関心の高まりを背景として、言語論を最重要テーマの一つとして認識しつつある。

アンリ哲学に目を向けるなら、アンリの哲学的出発点にはドイツ観念論と現象学がある。アンリがたえず批判的参照項とするハイデガーは、ギリシア存在論の独特の解釈を通して、ロゴスと存在との不可分の関係に着目し、繋辞を含む判断の構造から出発し、それを基礎づける存在の開示様態へと遡行する。この存在の開示様態は「超越」として特徴づけられる。それに対してアンリは、「超越」の根底に純粋な直接性の領域、すなわち「内在」を見出す。

では、こうした内在が、アンリの明言する通り「超越の本質」であるなら、内在はいかに超越が基礎づけた言語を（超越に代わって）基礎づけるのだろうか。言語は、伝統的にはその最小単位として語、あるいは「概念」をもち、その概念が「判断」（主語と述語の結合）を構成する。では、内在はこうした「判断」を構成する言語の基礎たりえているのだろうか。アンリは晩年のキリスト教解釈において独特の言語論を展開する。しかし、そこで確立される「生の言葉（Parole de la Vie）」は、判断を基礎づける「世界の言葉（parole du monde）」と明確に区別され、直接的体験を表現するものでしかない。確かにアンリの言語論は、セバ（D.-F. Sebbah）やオーディ（P. Audi）によって批判的研究が行われている。しかし、これらの研究は「生の言葉」に照準してはいるが、「生の言葉」と「世界の言葉」との関係については十分に論じてはいない。それに対してクレティアン（J.-L. Chrétien）の研究は、両者の関係こそアンリ哲学最大の難点であることを指摘し、それを言語論に即して論じている。ただ、アンリ言語論において重要となる、ビラン論およびマルクス論の「力能（pouvoir）」については主題化されていない。

２．研究の目的

そこで本研究は、アンリの言語論を、力能論に着目しながら改めて辿り直すことによって、「生の言葉」と「世界の言葉」とによって成立するアンリ言語論の統合的解釈を提示することを目指す。

３．研究の方法

本研究は、第一に、後期アンリのキリスト教三部作を取り上げ、そこで描かれる「生の言葉」と「世界の言葉」それぞれの特徴を整理するとともに、両者の関係性を明らかにする。第二に、キリスト教三部作の読解を通して浮かび上がる「生の言葉」による「世界の言葉」の基礎づけという問題に注目し、この問題の起源を、キリスト教三部作以前の著作、特に『マルクス』および『身体の哲学と現象学』の力能論にまで遡って特定する。というのも、アンリは遺稿において「キリストの言葉＝力能」という定式を繰り返すからである。第三に、キリスト教三部作最後の著作であり、アンリの遺作ともなった『キリストの言葉』を取り上げ、「生の言葉」と「世界の言葉」との架橋という問題への最終的な解答を明らかにする。

４．研究成果

（１）後期アンリ言語論の全体像

本研究は、まず『我は真理なり』（CMV）を取り上げ、「生の言葉」と「世界の言葉」の基本的特徴を把握した。「世界の言葉」とは、「語」や「意味」、さらには「繋辞」によって構成される言葉であり、「超越」を本質契機とする言葉である。それが表すものは「実在」ではなく「表象」にとどまる。それに対して「生の言葉」は、「超越」を排した「内在」の言葉であり、「絶対的生の自己啓示」によって構成される。それは「実在」を示す。なぜなら、絶対的生（あるいは神）の自己啓示は、自分自身の実在を直接感得するからである。「生の言葉」は聖書に即して「〈言〉（Verbe）」とも呼ばれる。それは必ず「自己性」という独特の個体性（時間空間による限定ではない個体化）を伴う現出である。この生固有の個体性を、アンリは「第一の生ける者」と呼び、それをキリストの形姿に重ねている。

こうした「生の言葉」論の特徴は、まず言語を徹底して「現出」の問題として理解する点にある。それは、アンリがハイデガーから獲得した視点である。しかし、ハイデガーの言語分析が「命題」や「言明」といった論理学的次元と不可分であるのに対して、アンリの言語分析は「感得」や「印象」といった経験論的次元のみを問題とする点で異なる。

なお、アンリはすでに『現出の本質』第６１節において同様の言語論をしていた。アンリはそこで「感情の言語」を「本源的〈ロゴス〉（Logos originel）」（EM689）と呼び、このロゴスは「世界の言語」、すなわち判断において成立する言語を拒否すること、あらゆる思惟の不在において成立することを確言する。それは「意味」も「記号」ももたないロゴスであり、ただ「感情が語る（le sentiment parle）」（EM690）としか言いようのない事態として捉えられる。ここには言語を現出の問題として捉える視点がすでに提示されており、また、このロゴスは「絶対者の名のもとで」語ると言われていることからも後期の問題構制の先取りを見ることができる。

現出に定位した言語論は、言語を（思惟・表象・判断といった）超越から独立したものとして提示する点、またそれが「絶対者」という超主観的な次元に支えられている点にもその独自の性格を見ることができる。

ただし、アンリの言語分析は必ずしも論理学的次元と無縁というわけではない。というのも、アンリは「生の言葉」がいかに「世界の言葉」を基礎づけるかを問うことでこの点に迫ろうと試みるからである。『我は真理なり』第１３章は、この点を論じている。そこでアンリは唐突にも『マルクス』の議論を参照する。アンリは「実際、生の見えない本質だけが、『経済』の世界における現出を説明する」（CMV307）と明言する。「経済」の世界とは交換価値の世界であり、また表象の世界である。アンリによれば、こうした「世界の内容」は「生」に由来する。これを言語論と結びつけるなら、「世界の言葉」は「生の言葉」からあらゆる内容を調達することになるだろう。

本研究は、この点について『我は真理なり』に続く『受肉』（CMV）へと目を転じて追究した。『受肉』は、世界の内容が生に由来する点を、「肉の非実在化（irréalisation d’une chair）」（INC219）として論じている。それを説明する際にアンリは、トラークルの詩における「意味（signification）」の構造に言及する。そこでは、あらゆる実在の消失において純粋な「意味」が立ち現れる。アンリはこの「意味」を、内的に感得されることのない「ノエマ」として捉え、それを「非実在」とみなす。しかし、ノエマの「内容」自体はあくまでも「肉」（「生」と同義）という実在に由来する。意味という非実在的な対象は、実在の生から派生するのである。それゆえ、あらゆる対象にはなおも「肉が宿る（habité par une chair）」（INC220）と言われる。それは、肉が対象をノエマとして構成しつつ、自らノエマの内容を産出しているからである。産出された内容が対象化されることで、意味、さらには「世界の言葉」が成立するのである。

こうした意味の理解はフッサールの構成理論から着想を得たものである（INC221）。ただ、アンリの特異な点は、構成の内容をなす「質料」が内在において感得される（それゆえフッサールと異なる）「現象学的質料（matière phénoménologique）」であり、それが決して感性的な触発を通して与えられるのではなく、もっぱら自己触発によって創出される点にある。この質料産出を伴う自己触発を、アンリは「能産的自己触発（auto-affection naturante）」（CMV138）と呼ぶ。本研究が後期アンリの言語論の諸特徴の一つとして『受肉』から引き出すのは、「生の言葉」が実在だけでなく、表象の内容を自ら産出するという事態である。

（２）後期アンリ言語論の背景

それは実は後期キリスト教解釈で初めて提示されたものではない。この点を、本研究は『我は真理なり』が指示した『マルクス』（M）にまで遡って明らかにした。『マルクス』はすでに能産的自己触発と同様の機能を、「実践（praxis）」あるいは「力能（pouvoir）」の概念に見出していたからである。アンリ言語論において力能は重要な役割を果たす。力能に注目するのは、アンリがその草稿において「キリストの言葉＝力能」という定式を提示するからである。

『マルクス』は、内在がいかに超越を基礎づけるかという問いをすでに主題化している。それは「諸観念の系譜学」、さらには「経済の超越論的生成」として追求される。『マルクス』でアンリは「実在（réalité）は表象に対立するだけでなく、表象を基礎づける」（M401）と明言している。そして「いかに実在（réel）は観念を生み出しうるか」（M405）を問うのである。ここには「生の言葉」がいかに「世界の言葉」を基礎づけるかという問いへの取り組みが含まれている。

アンリは、先のノエマの内容を産出する能産的自己触発の仕組みを、すでに次のように表現している。「諸表象の内容は〔・・・〕諸個人の生によってのみ説明される」（M409）。この「諸個人の生」とは、実践であり力能である。そして「諸表象の内容」は、アンリによって「生の『表出（expression）』、生の『言語（langue）』」（M410）と形容される。というのも、「ノエマ的思惟」は「個人的生の一契機」（M411）であり、この個人的生はまさに「イデオロギーの能産者（naturant）」、「究極の能産者」（M415）として機能するからである。

この能産的自己触発、「理念的客観性を生み出す力能」（M423）は「諸カテゴリーの超越論的演繹」（M429）を説明するものである。アンリは「諸カテゴリーの特殊な内容は〔・・・〕どこから由来するのか」と問い、即座に「それは生である」（M430）と答えている。それゆえ、カテゴリーとはまさに「生の〔・・・〕諸様態そのもの」（M431）である。カテゴリーが生に基づく以上、あらゆる判断もまた生に基づくことになる。アンリは「判断」に先行する「あらかじめ与えられたもの（donation préalable）」（M458）を認めている。

こうして『マルクス』において、生と表象とのあいだの「本質的連続性」（M411）、すなわち内在から超越へ、生の言葉から世界の言葉への本質的な移行が描かれることになる。それは、アンリによってマルクスにおける「欲求（besoin）」の経験、生ける労働による使用価値の産出とその交換価値への転化、さらには剰余価値の生成としても解釈される。

いずれもマルクス読解としては難点を含む解釈だが、本研究は以下の二点を注目すべき点として挙げる。第一に、こうした生からの諸表象の産出という構図は、ヘーゲル哲学への批判として提起されていることである。ヘーゲルが概念を起点に現実を説明するのに対して、アンリは現実を起点に概念を説明する。ただし、この場合の「現実」とは「生」であり、直接的に感得される生の運動である。こうした生の運動が、客観化を本質とするヘーゲル的精神の自己展開と対置されているのである（M456）。

第二に、アンリが生からの諸表象の産出を、ビランの身体論へと送り返している点である（M431）。本研究は、最初期アンリの著作『身体の哲学と現象学』（PPC）にまで遡って、この点を論究した。同書第 1 章において、すでに「諸カテゴリーの超越論的演繹」について論じている。アンリはビラン解釈を通して、カテゴリーが「エゴの諸力能」であり「生の根本様態」であることをすでに主張している（PPC44）。また同書第 4 章では、ビランの記号論、とりわけ「記号の二重使用」の記述に触れながら、「言語（langage）は、それが表現する絶対的主観性の生にいかに基礎づけられるか」（PPC152）を問うている。このことが意味するのは、「生の言葉」による「世界の言葉」の基礎づけが初期アンリにおいてすでに課題として自覚されていたということ、さらにその「力能」による解決が試みられているという事実である。

（３）アンリ言語論の完成

この二つの言語の架橋という問題は、最終的に『キリストの言葉』（PC）において明確な答えが与えられることになる。『キリストの言葉』は全編を通して、いかに神の言葉（キリストの言葉）が有限な人間によって聴取されうるかを問い続ける。というのも、確かにキリストは、人間の言葉で神の言葉を語るからである。同書の記述は、そのほとんどが『我は真理なり』と『受肉』の議論を繰り返したものだが、クレティアンの指摘の通り、「たとえ話（parabole）」を強調した点において独自の意義をもつ。

『我は真理なり』においても「たとえ話」への言及はある。ただ、必ずしも「生の言葉」と「世界の言葉」との架橋として捉えられているわけではない。それに対して『キリストの言葉』第 9 章では次のように言明される。「たとえ話の企図は、〔・・・〕見えるもの（visible）の世界（univers）と見えないもの（invisible）の世界、有限者（fini）の世界と無限者（infini）の世界という二つの世界のあいだの類比を確立することにある」（PC116）。実際、「たとえ話」は「世界の言葉」で語られている。しかし、それを受け取る人間は「たとえ話」という「世界の言葉」を介して「世界の言葉」の彼方へ、すなわち「生の言葉」へと至ることができる。ここでたとえ話は、二つの世界を架橋する特権的な「世界の言葉」として捉えられている。

『キリストの言葉』が示したのは、「生の言葉」と「世界の言葉」とに共属する言葉の存在である。それがキリストの語るたとえ話である。このたとえ話を、表面的にのみ受け取るか、それともその背後に隠された真の意味に受け取るかによって、人間は「世界の言葉」にとどまるか、それとも「生の言葉」へと向かうかが決まることになる。

ここで重要な点は、世界の言葉にとどまるか否かは、まったく人間自身の所業として捉えられている点である。この点についてアンリは、『キリストの言葉』結論部で、人間の悪に言及することで一つの素朴な結論に行き着く。それが「人間のエゴイズム」（PC153）である。生の言葉そのものは、決して世界の言葉へと転化することはない。むしろ生の言葉を聴く人間が、それによって産出された「内容」を対象化してしまうことによって、世界の言葉が成立するのである。

この点は、すでに『マルクス』においても「抽象」の問題として論じられていた主題である。アンリは、一方で力能たる生が内在領域において多様な現実を産み出しながら、他方で個人がその所産を抽象し対象化することによって、超越領域における観念、イデオロギー、交換価値を生じさせることを「経済の超越論的生成」として描き出している。つまり、アンリ言語論における「生の言葉」による「世界の言葉」の基礎づけは、無限な生ではなく、もっぱら有限な人間に委ねられているのである。というのも、（無限な）絶対的生そのものは、一貫して現象学的質料を産出するのみで、それを対象化することはないのに対して、（有限な）人間はそれを受け取った後、一方で内在において感得しつつ、他方でそれを超越において対象化することが想定されているからである。

以上から獲得される後期アンリ言語論の解釈は以下の通りである。内在と超越という現出の二元性は、言語論において「生の言葉」と「世界の言葉」という二元性として展開される。「生の言葉」は、一方で（自己触発として）自己性を確立しつつ、他方で（力能＝能産的自己触発として）多様な内容を産出する。この段階では「生の言葉」は内在領域にとどまっているが、力能による内容の産出が、内在領域から超越領域への移行を可能にする。というのも、この内容を受け取った人間は、それを抽象化・対象化することによって超越領域に位置づけることができる。この「生の言葉」から「世界の言葉」への転換は、『キリストの言葉』において「たとえ話」の解釈として具体的に描かれることになる。

しかし、それはあくまで有限な人間に委ねた説明に終始しており、「生の言葉」の構造には「世界の言葉」の構造が含まれていない。両者は常に外在的な関係にとどまっている。生の言葉が表象の内容を産出するとしても、その所産の対象化の必然性は説明されない。その意味で、前者による後者の基礎づけという課題は不十分なままにとどまると結論することができるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 服部敬弘	４．巻 12
２．論文標題 内在と絶対者―『現出の本質』における反ヘーゲル主義の問題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ミシェル・アンリ研究	６．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20678/henrykenkyu.12.0_15	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yukihiro Hattori	４．巻 68
２．論文標題 L'universel et l'individu:l'heritage de l'idealisme dans l'oeuvre de Michel Henry	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化学年報	６．最初と最後の頁 31-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 服部敬弘
２．発表標題 表象から生の様態へ―アンリのカント解釈をめぐって―
３．学会等名 日仏哲学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 服部敬弘
２．発表標題 内在と絶対者―『現出の本質』における反ヘーゲル主義の帰趨
３．学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yukihiro Hattori
２．発表標題 Derrida et la question du Geschlecht
３．学会等名 Jacques Derrida et la phenomenologie（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yukihiro Hattori
２．発表標題 L'auto-negation de la vie dans le Marx de M. Henry
３．学会等名 Phenomenologie et ses autres（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Yukihiro Hattori
２．発表標題 L'universel et l'individu: l'heritage de l'idealisme dans l'oeuvre de M. Henry
３．学会等名 Rencontres internationales de l'idealisme（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関